

彙報

二〇〇八年一月より
二〇〇八年二月まで

研究班

中國繪畫の総合的研究 班長 曾布川 寛

中國繪畫の資料は、發掘に基づく古代・中世作品の出現、傳世する近世作品の公開などによって、近年ますます増加の一途をたどっているが、多くは未消化のまま放置されているのが現状である。この膨大な資料に對して、まずデータベースによる系統的整理が必要であり、また多方面からのアプローチが要求されている。本研究班は可能な限り資料を収集し、様式論、圖像學、畫論、技法はもとより、パトロン、蒐集などの觀點から考察し、更に書法・篆刻、詩文などの面からのアプローチも加え、総合的な研究を試みる。今年度は、山西省太原市考古研究所所長の李非氏、ウクライナ國立考古學研究所のユーリー・パプロビッチ・ザイツェフ氏に講演をしていただくとともに、『中國石窟寺院と石經』、『中國と朝鮮の繪畫』と題して二回のワークショップを行った。班員及びゲストスピーカーによる發表は、以下の通りである。

一月二二日 趙孟頫「吳興清遠圖卷」につ

二月 四日 (傳) 李成「喬松平遠圖」(澄

懷堂美術館藏) について

西尾 步
竹浪 遠

二月一八日 彬縣大佛寺石窟大佛の研究

張 南南

二月二三日 山西省太原の新出土文物

李 非

四月二八日 『天馬展』解説 永井 洋之

五月二二日 ウクライナ・ウストゥアルマ

出土の漢代漆器とその文様

ユーリー・パプロビッチ・ザ

イツェフ

徐顯秀墓壁畫の様式について

河野 道房

五月二六日 中國藝術における「精」

宇佐美文理

六月 九日 唐代佛教美術におけるインド

佛教美術の影響 西林 孝浩

六月二三日 北欄居簡の墨蹟をめぐる

弓野 隆之

七月 七日 李成・郭熙と李郭派の山水畫

塚本 麿充

一〇月二三日 『崇高なる山水—中國・朝鮮、李郭系山水畫の系譜—』

塚本 麿充

解説

一〇月二七日 中國繪畫における模倣の價值

宇佐見文理

十一月二九日 ワークショップ『中國石窟寺

院と石經』

山西風峪の華嚴經刻經—石刻

と拓本の比較對照

顏 娟英

敦煌莫高窟第二八五窟壁畫・

日中共同調査の成果から—文

化財研究の可能性—

岡田 健・高林 弘實

雲岡石窟再考 曾布川 寛

一二月 八日 ワークショップ『中國と朝鮮

の繪畫』

趙孟頫繪畫の意味についての

考察—鵲華秋色圖のイコノロ

ジーを端緒として—

西尾 步

朝鮮前期の瀟湘八景圖—東ア

ジアの視點から—

板倉 聖哲

沈南蘋と肖像畫 西上 實

西陲發現中國中世寫本研究 班長 高田 時雄

一九世紀末以來、敦煌・トルファンさらに東ト

ルクスタン各地の遺蹟から數多くの寫本が発見さ

れた。しかし、これらの寫本の研究は、資料の公

開整備が格段に進んだこと、寫本研究の方法が嚴密化したことなどにより、近年全く新しい段階に入ったと言える。本研究班では、漢文寫本を中心とし、歴史・宗教・言語・文學など様々な角度から検討を加え、西陲發現寫本の總合的な研究を展開する。なお昨年度の報告は『敦煌寫本研究年報』(第二號)として刊行された。

二〇〇八年一月より二月までに行われた研究發表は以下の通り。

- 一月二八日 Imre GALAMBOS, A 10th century Dunhuang manuscript on the Gantong monastery at Liangzhou
Dr. 01698 「書儀」について
山本 孝子
- 二月二五日 俄藏敦煌文獻所收「月令」小考
藤井 律之
- 劉景云《法藏敦煌西夏文獻》考訂について
池田 巧
- 四月 七日 敦煌文獻中的應用文書——以齋願文本爲中心的考察
釋、驢駿 —— 一道唐代名録的考察
高 啓安
- 五月一九日 『賢劫千佛名經』について
山口 正晃
- 六月 二日 『杜家立成雜書要略』初探——敦煌書儀との比較を通じて
永田 知之
- 六月三〇日

重繪孩提時代…追尋兒童在中古敦煌歷史上 的蹤跡(嬰戲篇)
餘 欣

七月一四日 《俄藏黑水城文獻》「亡牛偈」續考
蔡 榮婷

九月二日 西陲發現の唐律斷片について
辻 正博

吐魯番高唱供食文書中的肉食量詞
高 啓安

一〇月二〇日 西陲發現夾註本黃石公三略小考
藤井 律之

十一月一七日 西域出土の考課關連文書をめぐって——巴達木二〇七號墓出土文獻を中心に
松浦 典弘

「法門名義集」をめぐる二、三の考察
米田 健志

十二月 一日 句道興『搜神記』と道宣
玄 幸子

吐魯番文書における「群牧」と「市馬使」
中田 裕子

漢簡語彙の研究
今年度も引き続き居延舊簡を中心として語彙を檢討し、語義を確定した。本研究班で確定させた語彙数は、二〇〇八年末の時點で、約一七〇〇項目となった。來年度は居延新簡のF22を對象とした語彙の抽出も並行して行う豫定である。

班長 富谷 至

二〇〇八年年度の擔當者は次の通りである(排列

は擔當順)。

井波陵一、辻正博、吉村昌之、大川俊隆、藤井律之、鷲尾祐子、土口史記、馬場理恵子、目黒杏子、山元宣宏、森谷一樹、宮宅潔、富谷至、角谷常子、鷹取祐司、米田健志。

傳統中國の生活空間
中國の傳統的な生活空間および造形、すなわち具體的には住まい、宮殿、庭園、あるいは家具配置、室内空間、日常生活と儀禮等々の諸相をとおり、その特質を探る。時代・地方を限定せず、また建築空間に限らず、廣義的な意味で日常あるいは儀禮の生活空間を對象として、中國學の關連分野および東アジア、周邊地域の専門家の参加を得て、多様な研究主題をとりあげてゆく。研究發表と併行して會讀するテキストとして、明・方以智『通雅』宮室をとりあげる。この期間に行われた研究發表および會讀と擔當者は以下の通り。

二月一九日 元朝の皇室が造營した寺院——チベット系要素と中國系要素
福田 美穂

三月 四日 廣東珠江デルタにおける水上人の定住化と風俗習慣の變容
——祖先・神祇祭祀、分家儀禮を中心にして——
長沼さやか

四月二日 『宋史』災異史料に見える宋代住宅用語
塚本明日香

一〇月一四日 北畠氏館跡庭園
見學會

一〇月二八日 『通雅』卷三十八宮室
桓門

高井たかね

一月二五日 『通雅』卷三十八宮室 屋

極、榎樓 高井たかね

二月九日 『通雅』卷三十八宮室 畿、

根・蘭 塚本明日香

三教交渉の研究(二)(二〇〇五—二〇〇九年度)

班長 麥谷 邦夫

本研究班は、「三教交渉の研究」研究班の後を承け、引き続き中國中世における儒佛道三教間のかかはりをさまざまな角度から研究することを目的に、二〇〇五年度から五年間の豫定で組織された。昨年は、陳垣『道家金石略』所收の隋唐道教關係碑文のうち以下の九碑の解讀を行った。

葉國重碑

慶唐觀紀聖銘

御制葉真人碑

江州冲陽觀碑

貞一先生廟碣

天臺山桐柏觀碑

張探玄碑

王屋山劉若水碑

王屋山柳尊師眞宮志銘

北朝石刻資料の研究

班長 井波 陵一

前年度に引き続き、人文科學研究所所藏の北朝石刻資料に關して、文字の對校、および訓讀・語註の作成をおこなった。本年取り上げた資料は、「元興墓誌」「鄭義碑」「論經書詩刻」「司馬景和妻墓誌」「瘞鶴銘」「齊郡王祐造像記」「刁遵墓誌」である。

二〇世紀中國の社會システム(二〇〇三、四—二〇〇八、三) 班長 森 時彦

清末から現在にいたる一〇〇年間に於ける中國の社會システムの變動を多様な側面から總合的に検討してきた本研究班は、二〇〇八年三月をもって五年間の研究期間を終了した。二一編の研究成果を掲載する報告論文集は、二〇〇九年六月の刊行をめざして鋭意編集作業を進めているところである。

二月一日 一九三〇年代定縣の政治空間 — 平教會と共產黨との交差 袁 廣泉

二月一五日 清末中國の幣制改革に關する — 考察—ジェンクス委員會をめぐる 武上眞理子

長江流域社會の歴史景觀(二〇〇八、四—二〇一〇、三) 班長 森 時彦

本研究班(三年計畫)は、中國の中樞部ともいふべき長江流域社會が如何に形成され、如何に發展して近代世界と向きあうようになり、そして中國社會に如何なる影響を及ぼしたのかといった様々な問題を、人文學的、とりわけ歴史學的なパースペクティブから多角的に解明することを目指してスタートした。

初年度は以下のような報告が行われた。

四月二五日 長江流域社會の商品流通と近代化過程 森 時彦

五月一六日 爲『尙書古文疏證』辨護 房 德鄰

五月三〇日 北京政府期における「國歌」をめぐる論争について 小野寺史郎

六月一三日 南澤與近代中國 桑 兵

六月二七日 清末における日本浪人の在華事業—井手三郎と『同文滬報』 王 萌

九月二六日 戊戌變法前後孫寶瑄的社會活動和思想狀況研究 項 巧鋒

一〇月一〇日 廣東諮議局議員と在省知識人 — 賭博禁止議論を巡って 宮内 肇

一〇月二四日 近代中國走向世界的海外游歴 使 王 曉秋

十一月四日 二〇世紀前半、南京江心洲開發史—地主と農民の役割をめぐる 片山 剛

十一月二八日 一九二〇年代の上海閘北電廠、閘北水電公司について—給水事業を中心に 村田 省一

十二月二日 奉天・大阪・上海—奉天雜貨商のネットワークについて 上田 貴子

漢字情報學の構築(二〇〇四、三—二〇〇八、三) 班長 安岡 孝一

本研究班の主眼は、漢字テキストをコンピュータというマナイタの上に載せて、何とかテキスト

處理できるようにしよう、というものである。四年間の活動で一定の成果が得られたことから、二〇〇八年三月に本研究班を終了した。本年（二〇〇八年一月～三月）は、研究班の活動成果をまとめあげる作業に傾注し、報告書を二〇〇八年九月発行の『東方學報 第八三冊』に掲載した。

東アジア古典文献コーパスの研究（二〇〇八・四～二〇一二・三） 班長 安岡 孝一

二〇〇八年四月に発足した本研究班では、明治～昭和初期に日本国内で作成された訓讀漢文テキストをコーパス化し、それを基に、漢文の意味構造を解析するシステムの研究・開発をおこなう。すなわち、これまで漢文を読むための技法に過ぎなかつた訓讀を、コンピュータによる文法解析メソッドの一つとして、情報學的視點から捉えなおす。本年は、コーパスの外堀を埋める意味で、漢文の構造解析に關する議論をおこなった。なお、本研究班では、参加者全員が文献や書籍を見ながら論じ合うというスタイルを取っているため、特定の発表者等は記さないことにする。

四月一五日 Web 漢文大系
五月二〇日 『漢文大系』 史記列傳
六月 三日 訓點エディタ

六月一七日 L E G O で作った全自動ブックスキヤナ
Kirtas APT 1200

七月 一日 漢文訓讀の數學的構造について

訓點オートマトン
訓讀文を読む順序
McCh を用いた古典中國語の形態素解析の試み

七月 一五日 「項」の送り假名にもとづいて、動詞が取る「格」を判定できるか

九月 一六日 琉球外交文書『歴代寶案』における構文解析の試み
漢文文書の分かち書きと辭書生成について

一〇月 二二日 科學研究費申請に向けて
一 一月 四日 中國基本古籍庫
漢文エディタ

一 一月 一八日 漢字文化圏の訓讀現象
漢字文化圏西端にも存在した「漢文訓讀」

一 二月 二日 「訓讀」論（勉強出版）
チャンキングの段階適用による日本語係り受け解析

一 二月 一六日 依存關係表示と綫條化變換
銀雀山漢墓竹書殘簡の整理―中國古代の基礎史料
一月から三月までは、研究室の引越しなどのため活動を休んだ。

昨年は論文と古文字資料の二本だてで進めていたが、今年は古文字資料に一本化することにした。ただし、まずは読みかけの論文「寒食與改火―介子推焚死傳説研究」を片づけ（四月一八日～六月二〇日）、次にやはり読みかけの上海博物館藏楚簡・恆先を読み終え（六月二七日～七月四日）、さらに同じく彭祖（七月一日）、采風曲目（九月一九日～二六日）、逸詩（二〇月三日）、昭王毀室（一〇月一〇日）、昭王與共之雉（一〇月一七日）、東大王泊早（一〇月二四日～三一日）、内禮（一 一月七日）、相邦之道（一 一月一四日）に進んで、現在、曹沫之陳を読んでいる（一 一月二一日～二 二月二二日）。

讀書記録をまとめる作業は、はかどっていない。『日古』第十一號（三月二八日）に郭店楚簡の性自命出、成之聞之、『日古』第一二號（八月二九日）に上海博物館藏楚簡の孔子詩論、子羔、魯邦大早の札記を掲載した。また、銀雀山竹書殘簡の整理作業も、進行が遅れている。

陰陽五行のサイエンス 班長 武田 時昌
陰陽五行説は、物類や自然現象の法則性や相互關係を説明する原理として大いに用いられた學説であり、中國の諸分野において独自の理論構造を生み出すパラダイム的な役割を果たした。これまでの研究においては、陰陽五行説の成立過程や配當説、それを援用した漢代の政治思想等に詳しい考察が試みられてきた。しかしながら、三國時代以降の史的展開や理論構造の特質については、十分な検討がなされているわけではないように思われ

る。そこで、自然學に限らず思想、宗教から文學、諸技藝に至る多彩な分野において、天人感應、物類相感等を含めた陰陽五行の説明原理が、實際にどのように活用されているのかを分析し、包括的、複眼的な見地からその構造と特色あるいは限界性を考究したいと考えている。

二〇〇八年度は、引き続き『五行大義』巻二を會讀し、班員による研究発表を行った。四月には、ケンブリッジ大學ニードム研所長の Christopher Cullen 教授、フランス國立科學研究センター (CNRS) 研究員の Catherine Jani 教授を招いて特別講演會(日本科學史學會京都支部との共催)を開催した。一月にはベトナム漢喃研究所である丁克順教授 (DINH KHAC THUAN) を招いて特別講演會を開催した。また、『春秋繁露』郊祀諸篇、劉完素『素問玄機原病式』、『曆象新書』の讀書會も随時行った。

研究発表、特別講演會の日程、演題、発表者は、以下の通りである。

- 四月二十六日 韓國での西洋天文學の受容について 全 勇勳
 康熙帝時代の數學研究 Catherine Jani
 五月十七日 望診・望氣・相術 坂出 祥伸
 六月二十八日 術數類の歴史と「科學」 宇佐美文理
 七月十九日 「水」に生まれ「土」に歸る
 — 道教における五行説の展開

加藤 千恵

- 一月一日 五行と自然物、醫藥 その即物的考察 森村 謙一
 房中術と陰陽 大形 徹
 二月二〇日 僧深方考 多田 伊織
 越南古籍的特點關於越南的醫書 丁 克順

元代の法制

班長 岩井 茂樹

二〇〇四年度から發足したこの研究班は、元朝時代の行政文書・法制文書の會讀をつうじて、その時代の制度と社會について知見をひろめることを目的としている。参加者それぞれが、會讀の作業のなかから研究すべき課題を見だし、この時代の制度と社會の特質を理解する足がかりを得ることを期待している。とくに、前後の時代との連続と斷絶という問題について洞察を深めたい。すでに『大元聖政國朝典章』二八〜三三および『新集至治條例』所收の禮部にかかわる部分の會讀を終えた。當該部分について、校訂電子本文を閱覽・檢索する Web アプリケーションを公開するとともに、『元典章 禮部』校定と譯註(一)として卷二八、禮制一(朝賀 進表 迎送)の譯註を、同(二)として卷二九、禮制二(服色 印章 牌面 誥命)、同(三)として卷三十、禮制三(婚禮 喪禮 葬禮 祭祀)として『東方學報』に掲載した。本年度は、研究報告のほか、『元典章』工部の會讀をおこない、建築や紡織など當時の技術および建物、橋梁、船隻の管理制度などの問題について知見をひろげることができ

た。二〇〇八年一月〜二月の報告題目と擔當者を掲げる。

- 一月一日(火) 研究報告「金元以降の『五刑』の變遷と峻法重典」 岩井 茂樹
 二月 五日(火) 『元典章』五八 工部一 造作一 段疋 岩井 茂樹
 二月 一九日(火) 『元典章』五八 工部一 造作一 段疋 古松 崇
 三月 四日(火) 『元典章』五八 工部一 造作一 雜造 矢木 毅
 三月 一八日(火) 『元典章』五九 工部二 造作一 橋道 山崎 岳
 『元典章』五九 工部二 造作二 船隻 植松 正
 四月 一五日(火) 『元典章』五八 工部一 造作一 雜造 矢木 毅
 研究報告「清末民初の舞臺女優」 張 雯
 五月 一三日(火) 『元典章』五九 工部二 造作一 橋道 山崎 岳
 五月 二七日(火) 『元典章』五九 工部二 造作一 船隻 植松 正
 六月 一〇日(火) 『元典章』五九 工部二 造作一 船隻 植松 正
 六月 二四日(火) 『元典章』五九 工部二 造作一 船隻 植松 正
 七月 八日(火) 『元典章』五九 工部二 造作一 船隻 植松 正

『元典章』五九 工部二 造

作二 公廩 岩井 茂樹

一〇月四日(火) 『元典章』五九 工部二

造作一 公廩 岩井 茂樹

一〇月二八日(火) 『元典章』五九 工部二

造作一 公廩 岩井 茂樹

十一月二五日(火) 『元典章』六十 工部三

役使 祇候人 小野 達哉

十二月 九日(火) 『元典章』六十 工部三

役使 祇候人 小野 達哉

『元典章』六十 工部三 役

使 弓手 岩井 茂樹

班長 金 文京

唐代文學の研究

昨年度に引き續き、正倉院所藏、光明皇后親筆の唐代書儀『杜家立成雜書要略』の講讀し、譯註を作成した。また關連する研究發表を行った。講讀箇所と擔當者―第九「賀知故得官書」(上原尉暢、第一〇「與知故在京書」(堂蘭淑子)、第一一「與知故別近書」(同上)、第一二「與知故別經宿書」、第一三「頻得知故書」(好川聡)、一因使過知故不在留書」(同上)、第一五「辱知故謝書」(同上)、第一六「偶逢名客即離於後與書」(姜若冰)、「問知故遭災書」(同上)、第一八「問知故逐賊書」(姜若冰)、第一九「問知故遭官得雪書」(林香奈)、第二〇「辱名客就知故貸鷄鷄書」(同上)。研究發表―大野修作「『杜家立成』の書法史的側面」、齋藤茂「唐人送別詩并尺牘」について。

眞諦三藏とその時代

班長 船山 徹

研究班四年目の今年度は、以下の諸文献の譯註を作成しながら内容分析を試みた。(一)内は各回の擔當者。續高僧傳曇遷傳(麥谷邦夫、古松崇志、齋藤智寛)、眞諦撰俱舍論義疏佚文(那須良彦(二回擔當))、眞諦撰涅槃經義記佚文(大竹晉)、眞諦譯明了論本文(生野昌範、三宅徹誠、池田將則、中西啓子、室寺義仁)、眞諦撰明了論疏佚文(那須良彦、池田將則、藤井淳)、廣州調查旅行報告(古勝隆一)。なお前年までと同様に、これらの解讀資料に對して研究班開催後に提出された補足訂正等については、その都度、メーリングリストを通じて班員全員が知識を共有し、インターネット上での議論に加わった。本年度の解讀をもつて研究班發足當初に豫定していた文献の解讀はほぼ全て取り上げたことになる。來年度は、残るいくつかの補足的資料の解讀、各班員の研究報告、既に行つた解讀資料に對する未解決の問題點の再檢討などを行い、研究報告書の作成に向かう。

中國古鏡の研究

班長 岡村 秀典

二〇〇七年度は昨年に引きつづき音韻論から漢鏡の銘文を論じたB. Karlgren, "EARLY CHINESE MIRROR INSCRIPTIONS" (BMFEA, No. 6, 1934) を會讀した。平行して實施した研究發表は以下のとおり。

一月二九日 隋唐鏡の銘文 齊 東方
二月 五日 樂浪墳墓群と出土鏡 森下 章司

二〇〇八年度からは、漢鏡・三國兩晉鏡・紀年鏡に分けて、銘文の集成と注釋の作成にとりかかった。會讀と研究發表は以下のとおり。

四月二五日 漢鏡銘の會讀 岡村
四月二二日 隋唐鏡成立の二段階 内記 理
五月二三日 漢鏡銘の會讀 岡村
五月二〇日 三角緣神獸鏡銘の會讀 下垣 仁志
五月二七日 鄂城六朝墓の盛衰 向井 佑介
六月 三日 漢鏡銘の會讀 岡村
六月一〇日 三角緣神獸鏡銘の會讀 下垣
六月一七日 漢鏡七期の銘文檢討拾遺 森下
六月二四日 漢鏡銘の會讀 岡村
七月 一日 吳鏡銘にみる方言 光武 英樹
七月 八日 三角緣神獸鏡銘の會讀 下垣
七月 一五日 漢鏡銘の會讀 岡村
七月 七日 漢鏡二期における華西鏡群の成立と展開 岡村
一〇月 一四日 漢鏡銘の會讀 岡村
一〇月 二一日 紀年鏡銘の會讀 光武
一〇月 二八日 漢鏡銘の會讀 岡村
十一月 四日 三角緣神獸鏡銘の會讀 下垣
十一月 一一日 漢鏡銘の會讀 岡村
十一月 二五日 紀年鏡銘の會讀 光武
十二月 二日 三角緣神獸鏡銘の會讀 下垣

二月 九日 漢鏡銘の會讀 岡村

二月一四日 紀年鏡銘の會讀 光武

中國社會主義文化の研究 班長 石川 禎浩

冷戰體制の終結以後、いわゆる「社會主義の文化」は世界中で風化しつつあるが、今日の中國には、社會主義的な文化様式やイデオロギーがなお根強く残存している。現にそれらは、一般民衆の思考様式になお影響を與え、現體制の文化政策を方向付け、そして中國共產黨史の歴史記述を強く規定している。また、二〇世紀中國における社會主義文化の展開は、同時代日本の社會主義文化の影響を受けたばかりでなく、戦後には日本の中國學に大きな影響を與えたことも忘れてはなるまい。本研究班は、二〇世紀中國の社會主義文化の諸相を主に歴史的視點から研究することを旨としている。三年目の今年も、昨年に引き續き、京都大學現代中國研究據點（人文研附屬現代中國研究センター）の研究グループの事業という性格を合わせ持った活動を行い、活潑な議論を繰り廣げることができた。特に、本所の外國人研究員として桑兵氏が在任された二、七月は、毎回の報告、討議などすべてを中國語で行い、當初の予想をこえる積極的な意見交換、討議が見られた。各回の報告は以下の通りである。

一月二五日 「中國の改革・開放初期（一九八〇年代）の民族政策・政策基調の變化と朝鮮族社會への適用」 崔 佑吉
二月 八日 「南京國民政府時代における

上海越界築路地域の主權問題について——警察權問題を中心に」 村田 省一

二月二三日 「戦後中國知識分子關於内蒙古自治的論争」 島田 美和

四月一八日 「中國『睡獅』形象探源」 石川 禎浩

五月 九日 「金庸武俠小説在東亞世界——兼論社會主義文化中的武俠小説」 金 文京

五月二三日 「議修京師貢院及科舉制度的終結」 關 曉紅

六月 六日 「清末的『功利主義』」 川尻 文彦

六月二〇日 「中華民國臨時政府的成立與新社會的醞釀」 袁 廣泉

七月 四日 「國民政府時期『黨歌』、『國歌』的制定過程」 小野寺史郎

九月一九日 「一九八〇年代の民族政策と内モンゴル」 チョクト

一〇月 三日 「青島におけるドイツ語新聞『一八九八—一九一四』」 高 瑩瑩

一〇月一七日 「古井喜實と日中國交正常化」 鹿 雪瑩

一〇月三二日 「日中戦争前期における華北農村と中國共產黨・河北省涞源縣の八〇〇日」

二月 七日 「中華民國憲法制定史の再考」 田中 仁

二月二日 「孫文と醫學」『紅十字會救傷第一法』をめぐって」 中村 元哉

二月 五日 「辜君宜と『文藝學習』について」 村上眞理子

補原 俊代

研究班（人文學研究部）

複數文化接觸領域の人文學

班長 田中 雅一

今年は、本研究班の實質三年目に當たる。参加者の個別發表を中心に活動した。この研究班は人文學國際研究センターの據點プロジェクトでもあることから、センター主催の國際シンポジウムや講演會も重要な活動の一部をなす。また、研究會の成果の一部は『コンタクト・ゾーン』誌公刊という形で公表している。

- 二〇〇八年一月七日 「イラン立憲革命とクルジア義勇兵―「狂信的なペルシャ人」との接觸？」
報告：伊藤 順二
七四・P.八六
- 二月 四日 「『カーブル』會讀 一〇」
(P.八七・P.九八)
稲葉 讓 (會讀)
- 二月一八日 「イタリアの「蠶種商人」の目に映る日本―異文化との接觸を中心に (一八六〇―一八八〇)」
報告：BERTELLI Giulio
Antonio
- 三月 三日 「喪失の語りと創造の語りをめぐって―チベット難民舞踊

集團における傳統概念の検討」
報告：山本 達也

四月二日

「複數文化接觸領域研究の中間報告」
報告：田中 雅一

五月二日

「『カーブル』會讀 一〇」
(P.九九・P.一〇九)

六月 二日

「明治インド留學生の記録―小泉了諦・善連法彦のトルコ・歐州旅行その他」
報告：奥山 直司

六月二六日

「ディアスポラの知識人タラル・アサド―他者と共に在ること」
報告：磯前 順一

六月三〇日

「『カーブル』會讀 一一」
(P.一一〇・P.一二〇)

七月 七日

「米國人日本研究者が見た戦後日本―一九五〇年代初頭のミシガン大學日本研究センターの研究を中心に」
報告：谷口 陽子

一〇月 六日

「格義(かくぎ)と漢譯―異文化接觸領域としての漢語佛典」
報告：船山 徹

一〇月二〇日

「チベット難民の最重要文化はいかに構築されたのか―記述と社會實踐の接觸領域としてのラモとシヨトン」

報告：山本 達也
一二月一〇日 「治療實踐という接觸領域―西インド村落における不妊の病因論とその對處法」
報告：松尾 瑞穂

一二月 一日

「カーブル―文化接觸領域の都市」
報告：稲葉 穰

一二月二二日

「カトリック世界と『ファンダメンタリズム』―實體概念から概念の實體へ」
報告：藤原久仁子

移民の近代史―東アジアにおける人の移動―

班長 水野 直樹

一九世紀後半から二〇世紀前半の時期、東アジアにおいて様々な理由―世界資本主義システムへの包攝、日本帝國の膨張、各地域の社會的變動など―から、大規模な「人の移動」が生じた。しかし、この問題についての研究は、各國・地域別に論じられる傾向があり、総合的に考察されることは少なかった。主に日本、朝鮮、中國など各地域間の人の移動とその原因を検討し、人の移動の歴史の意味を考察することを目的として、歴史學(日本史・朝鮮史・中國史など)、地理學、社會學、經濟學など諸分野の研究者の共同研究として運営している。

二〇〇八年

二月 九日

「中國朝鮮族社會の變化とその意味―韓國との關係を中心として」(報告) 崔 佑吉

高全惠星監修・柏崎千佳子譯
『ディアスポラとしてのコリアン』北米、東アジア、中央アジア（新幹社、二〇〇七年一〇月）

三月 八日 「多木余次郎と朝鮮―多木農場と参政権問題について―」（報告）金 玄

「京都經濟と朝鮮人労働者―西陣織を中心に―」（報告）高野 昭雄

四月二日 「在滿朝鮮人の生活實態と『安全農村』」（報告）金 永哲

「帝國日本と朝鮮人の移動―『内地』渡航、滿洲移住と植民地放棄論・工業化論―」（報告）水野 直樹

五月一〇日 田中隆一著『滿洲國と日本の帝國支配』（有志舎、二〇〇七年二月）

（書評）松田 利彦
「日清戰爭と朝鮮華僑―保護清商規則と華商條規を中心に―」（報告）李 正熙

六月一四日 「漁民の移動および移住と漁撈技術の展開―臺灣東海岸の『移民村』におけるカジキ突

棒漁を例として―」（報告）西村 一之

「不逞鮮人」と「臺灣蠻人」―植民地期臺朝關係史のための覺書―」（報告）陳ジョンウォン

七月 六日 「一九二〇―三〇年代の在青島日本居留民について―土地租借權をめぐる日中間交渉を中心に―」（報告）長澤 一恵

「敗戦直後の村と人の移動（復員・引揚・歸還）―京都府南部地域寺田村を事例として―」（報告）安岡 健一

九月二〇日 「移民の適應―社會學の古典から現在へ―」（報告）竹澤 泰子

「滿洲國」成立初期の朝鮮人移民政策と在滿朝鮮人生活實態」（報告）金 永哲

一〇月一一日 「海外在留『帝國臣民』の在留禁止制度の運用―政治犯關係の實例を中心に―」（報告）イ・スンヨブ

「農業帝國」と「海洋帝國」の比較から人の移動を考える―近年のカリフォルニア學派に注目して―」（報告）籠谷 直人

一二月 八日 「日本帝國殖民地之比較研究」シンポジウム（臺灣中央研究院臺灣史研究所）に參加して」（報告）水野 直樹

「戦前日本在留朝鮮人の出版活動と印刷」（その一）（報告）小野 容照

一二月一三日 「植民地期朝鮮在住日本人の回想記―近年の刊行書を中心に―」（紹介）水野 直樹

「植民地臺灣における朝鮮人の接客業―新聞・雜誌記事の検討から―」（報告）藤永 壯

班長 大浦 康介
虚構と擬制―総合的フィクション研究の試み

四年目にあたる二〇〇八年は、小説、物語、寫眞、映畫、歴史敘述、音楽、科學技術等とフィクションとの關係を探った。研究發表は以下のとおり。

一月二六日 「私」という虚構―ジャン・パウルの小説構造をめぐって 池田 浩士

二月 四日 フランク・マクギネス『ソナム川に向かって行進するアルスターの息子たちを見守り給え』を読む 小關 隆
二月二五日 法的擬制の諸相
ミカイル・クシファラス

六月 二日 寫眞からフィクションへ――

ケンドール・ウォルトンの寫眞論を手がかりに

河田 學

六月 一六日 「遊び」の内と外をめぐって

近藤 秀樹

七月 七日 ミメーシスと「かのように」

――ヴォルフガング・イーザーとジャン＝マリイ・シエフェールによるフィクションのアソシオロジー 久保 昭博

一〇月 六日 物語階層違反と虚構内虚構

岩松 正洋

一〇月 二〇日 透明人間の夢

大浦 康介

十一月 一〇日 グルジアとオセチアの「高貴な野蠻人」像

伊藤 順二

十一月 二七日 映畫『紅葉狩』の二面性――

容の場をめぐって――

上田 學

十一月 二七日 「歴史小説」の可能性――

『モーゼと一神教』

小森謙一郎

十二月 一日 「命名をめぐって――逆シミュレーション音楽」前夜

三輪 眞弘

十二月 二五日 フィクションと現實の境界を

あいまいにする技術

鹽瀨 隆之

人種の表象と表現をめぐる學際的研究

班長 竹澤 泰子

二〇〇八年度が本研究班の最後の活動年度であることから、二〇〇八年は成果発表やその準備、また國際的な學術交流に重點をおいた活動となった。具體的には二〇〇九年に刊行豫定の論文集の合評會、海外から來日中の研究者や外國人研究者による研究報告をそれぞれ複数回もった。また教育への還元としては、全學共通科目「人種概念の總合的理解」を提供し、リレー講義を行った。

一二月に研究班が主體となり企画・實施した第一二回京都大學國際シンポジウム「變化する人種イメージ――表象から考える」は、岩井茂樹教授の總合司會のもと、松本紘總長による挨拶から始まり、横山俊夫副理事、金文京所長、實行委員長（班長）による挨拶、トロイ・ダスター氏およびエラ・ショハット氏による基調講演、個別の研究発表、若手研究者リレートーク、司會・コメントも含めると、總勢三三名が演壇に立ったこととなる。悪天候にもかかわらず多数の参加者があり、一般参加者対象のアンケート結果でも、関係者の間でも、きわめて高い評價を得た。シンポジウム翌日には、基調講演者・報告者に、國內外から招聘した専門家が数人加わり、より發展した議論を専門家會議として行うことができた。

なお二〇〇九年三月には、シンポジウムの報告書を、五月には岩波書店から論文集を刊行した。國際シンポジウムについては、研究班HPにてYoutube 動畫、挨拶・趣旨説明のテキスト、各

報告のアップストラクトを公開している。

(<http://kyodo.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~race/frame-symposium.html>)

新聞・ラジオ等のメディア報道については、以下のサイトで許可を得て公開している。

(<http://kyodo.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~race/frame-symposium.html>)

京都大學オープンコースウェアでは、二〇〇八年度開講した上記科目および二〇〇七年度開講の「人種の表象とリアリテイ」二科目について、それぞれシラバス・講義ノート、視覺教材等を公開している。

「人種概念の總合的理解」

(<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/institute-for-research-in-humanities.jp/a-holistic-understanding-of-the-idea-of-race/>)

「人種の表象とリアリテイ」

(<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/general-education-jp/zinbun-academy/>)

一月 二日 (金) 「成果刊行の理論的枠組

みについて」 竹澤 泰子

「精神分析とユダヤ的なもの」

立木 康介

一月 二日 (土) “Excluded Presence: Shoguns, Minstrrels and

Japanese Encounters with

the Black Other”

ジョン・ラッセル (岐阜大

學)

「ポール・ブローカの形質人類学：政治の否定と變移説の否定」

アルノ・ナンタ（フランス国立科学研究中心）
「コメント」

渡邊公三（立命館大學）

三月二五日（土）、三月二六日（日） 成果刊行に向けた合評會（合宿）

四月二五日（金）「Follow My Footsteps: Audio Tourism, Race, and Gender」

カレン・シマカワ（ニューヨーク大學）

五月三〇日（金） 成果刊行に向けた合評會

九月 九日（火） 成果刊行に向けた合評會

九月二六日（金） 「人間社會と心の個人差：生命科學研究者の意見から」

東島 仁（京都大學生命科學研究科）

「チンパンジーの協力行動：ヒトとの共通點・相違點」

小林 敦子

「矢崎彈『三代の女性』：小説に描かれた明治、大正、昭和の女性像」

山本 眞也（京都大學靈長類研究科）

九月二七日（土）「博物館における展示表象行為をめぐって—記憶装置と他者表象—」

吉村 智博（大阪人権博物館）

「寫眞史における人種」

生井 英考（共立女子大學）
十一月二四日（金）「成果刊行の序章について」

竹澤 泰子

東島 仁

「日系ブラジル人が日本において表象するブラジル文化」

エルナーニ・オダ（文學研究科）

「血を飲むユダヤ人」

小田雄一（人間・環境學研究科）

「カルチュラル・コンピューティングについて」

土佐尚子（京都大學學術情報メディアセンター）

十一月二五日（土）「Blood, Land, and Conversion: Mestizeness

and the Politics of Belonging in Post-Independence Philippines」

Caroline Hau（京都大學東南アジア研究センター）

「Searching for Self in the Global South: Representations of Jamaicans in Japanese Travel Writing」

Marvin Sterling（インディアナ大學、人文研客員）

二月六日（金）、七日（土） 第一二回京都大學國際シンポジウム「變化する人種イメージ—表象から考える」開催

二月八日（日） 専門家會議

啓蒙の運命—系譜學の試み

班長 富永 茂樹

本共同研究の最終年度にあたる二〇〇八年には、以下のとおりの一八の研究報告があった。そのほとんどが報告書に収録される論文の執筆をめざした完成度の高いものであり、このあと年度末までに豫定している四報告も加えて、報告書の作成に向けて動き出すことが可能になったと考えられる。ゲストによる三報告もまた、きわめて刺激的で、班員各位が論文を進めるうえで参考となる以上の意義をもつものであった。

研究會記録（二〇〇八年）

一月一八日「労働は自由にする——ナチズムにとつて自由とは何か」

藤原

二月 一日「啓蒙と『投資社會』」

坂本

二月二九日「フランス—一九世紀末における

- 三月二四日 「啓蒙が法になしたこと」 白鳥
ミカエル・クシファラス（ゲスト）
- 三月二八日 「啓蒙とその『危機』…一七六三年から一七八一年までのレナル／デイドロ／ネッケル」 王寺
- 四月二五日 「ル・メルシエ・ド・ラ・リヴィエールにおける啓蒙と神祕主義―『幸福な國民またはフェリシー人の政體』（一七九二）における宗教―」 増田
- 五月九日 「啓蒙とフィクション論」 久保
- 五月二三日 「マルセル・ゴシエ『世界の脱魔術化』と『近代の革命』をめぐって」 宇野
- 六月六日 「ヨハンネス・ルドルフス・アネビグラーフスの幾何學的月世界旅行」 長尾
- 六月二七日 「永遠平和の運命―アベ・ド・サン＝ピエール、ルソウ、カント」 多賀 茂
- 七月四日 「トクヴィル、サルミエントとラテンアメリカの非民主主義」 松下
- 七月二八日 「終わりある（啓蒙）と終わらなき（啓蒙）…スピノザ／ルソウとその後」 佐藤
- 九月二六日 「『啓蒙』と（パレーシア）あるいは主體化の交差と遍歴―フーコー晩年の講義を讀む」 市田
- 一〇月一〇日 「缺如の經驗をめぐって…世紀ユダヤの知の理論から」 向井
- 一〇月二四日 「デイドロと二重のエクリチユール」 李 永陸（ゲスト）
- 十一月七日 「世界の脱辨證法化―ハーバースの『コミュニケーシヨン行爲の理論』を中心に」 齊藤 涉
- 十二月五日 「シャトーブリアン…舊世界と新世界の間で」 フランソワ・アルト（ゲスト）
- 二月一九日 「反革命と啓蒙―バリユエル、ド・メーストル、ラ・アルプの場合」 桑瀬
- 近代古都研究 班長 高木 博志
研究班は三年を経過したが、歴史都市として、古都奈良・京都のほか地方城下町も研究対象に廣げてきた。
二〇〇八年度には、「歴史と都市」をめぐり、京都・奈良、首里、仙臺、金澤などの研究が報告された。そのほか、岡山における城下町の近代、都市の水利構造などの研究報告と實地調査も行った。軍都、古都などの概念も深めている。二〇〇九年度には、仙臺の調査を豫定に入れている。また前回の共同研究班の報告書として『近代京都研究』（思文閣出版、二〇〇八年、丸山宏・伊從勉との共編）を刊行した。
二〇〇八年
一月二二日 「古刹寺保存と近代京都の建築造營」 清水 重敦
「近世畿内における神功皇后傳承―御香宮神社と桂女・祇園會を中心に」 野村 奈歐
三月一五日 「一五年戦争と京大圖書館」 廣庭 基介
「ランケの日本的領有」 小山 哲
四月一九日 「近代京都の名所―櫻や古典文學を手がかりに」 高木 博志
「實業家武岡豊太と三都の歴史―神戸史談會・皇陵巡拜會・乃木神社」 黒岩 康博
五月一〇日 「日吉山王社の近世…二、三の問題」 John Breen
「地價分布の變化からみた近代東京の地域構造の一断面―舊東京市神田區域の場合」 山田 誠
六月二二日 「『軍都』論の再検討」 原田 敬一

「城下町の近代と「古都」イメージ」百萬石の「傳統」文化」 本康 宏史

七月二五・二六日 岡山巡見（岡山大學構内舊陸軍施設・同大學附屬圖書館池田家文庫・後樂園）

案内：小野 芳朗 萬城 あき

九月一九日 人文科學研究所舊東方部書庫見學・黒谷文人墓掃苔

案内：岡村 敬二 廣瀬千紗子

一〇月一八日 「大京都の時代の都市計畫——近年發見の史料から歴史資料の傳來を考える」 秋元 せき

「明治維新史の再検討」氣になつてゐる諸點」岩井 忠熊

一〇月二五日 名古屋巡見（徳川美術館・名古屋城・舊中村遊廓）

案内：竝木 誠士 朝日美砂子

一一月二二日 「権門寺社の歴史と奈良町の歴史との間」 幡鎌 一弘

「敗戦前後の佐々木惣一——近衛文麿との關係を中心に」 松尾 尊兌

一二月二〇日 「軍都・學都・杜の都と仙臺——生活歴（祭りと年中行事など）」と戦死者祭祀の變遷」

佐藤 雅也

「軍統治下沖繩の自治的都市計畫——一九七二年施政權返還前に本土並み都市計畫制度に復歸した琉球政府の選擇」

伊從 勉

第一次世界大戰の總的研究に向けて

班長 山室 信一・岡田 暁生

二〇〇七年四月以來、本研究班では、戦後世界までを視野に入れつつ、さまざまな角度から第一次世界大戰の歴史的インパクトの内實を明らかにする作業を續けてきた。二〇〇八年度には、美術史、文學史、歴史學、思想史、等の視點からの報告があつた。また、二〇〇八年度後期には全學共通科目として「人文研アカデミー」第一次世界大戰と現代社會」をリレー講義の形式で開講し、一〇〇名をこえる受講者を得た。なお二〇〇七／八年度の研究会を通し、第一次世界大戰がヨーロッパ外の現代史において、豫想以上の影響を與えていたことが明らかになつた。従つて二〇〇九年度は主としてこの問題に焦點を當て、研究班を繼續することとする。

研究会記録（二〇〇八年）

一月一四日（月）「切斷の時代——第一次世界大戰前後の美術の諸相」

河本 眞理

一月二八日（月）會讀：The Oxford Illustrated History of the First World War. Chaps

四、五、九、一〇、一九、二一（擔當：王寺 賢太、伊藤 順二、藤原 辰史）

二月一八日（月）「歐洲大戰」と日本の『新興文學』——文學史を讀みかえる試みのひとつとして」 池田 浩士

四月二二日（月）「戦火學がる——第一次世界大戰と日本人（その一）」 山室 信一

五月一七日（土）「被治者の合意」と集産主義——アメリカの「偉大な戦争」 中野耕太郎

五月二六日（月）「觀戰武官酒井鍋次——第一次大戰をめぐる軍人の思想を考察してゆくための準備」 片山 杜秀

六月一四日（土）「總力戰の論理と徴兵制——オーストラリアにおける徴兵制國民投票をめぐる」 津田 博司

六月二三日（月）「南アフリカと第一次世界大戰」 堀内 隆行

七月一四日（月）「戦争神經症——リヴァーズとフロイト、時々、サスーン（とグレイヴズ……）」 富永茂樹

一〇月二一日（土）「ハンガリーから見た第

一次世界大戦…一九一八年の
歴史的演奏會を中心に」

伊東 信宏

一〇月二七日(月)「第一次世界大戦とイン
ド—民族運動の轉換點とし
ての大戦」 田邊 明生

十一月 八日(土)「A New Hope 新たな
る希望—三輪常次郎「執務
文書」からみた第一次世界大
戦期と戦後」 籠谷 直人

十二月 八日(月)「青野原俘虜收容所の世
界—非總力戦論序説—」
大津 留厚

十二月二二日(月)「日本における未來派の
受容と神原泰の藝術」
高階繪里加

人文研アカデミー(講義)

一〇月 六日(月) イントロダクション…
「ファースト」「グレイト」
「ワールド」「トータル」
小關 隆

一〇月二〇日(月) 總力戦と徴兵制
小關 隆

一〇月二七日(月) 音楽史革命と第一次世
界大戦 岡田 曉生

十一月一〇日(月) 第一次世界大戦と「ク
ラシック音楽」の終わり
岡田 曉生

十一月二七日(月) フランス文學における

第一次世界大戦(二)

久保 昭博

十二月 一日(月) フランス文學における
第一次世界大戦(二)

二月 八日(月) 西洋思想史のなかの第
一次世界大戦(一)
王寺 賢太

二月二五日(月) 西洋思想史のなかの第
一次世界大戦(二)
王寺 賢太

十二月二二日(月) 食糧と第一次世界大戦
(一)
藤原 辰史

一月 五日(月) 食糧と第一次世界大戦
(二)
藤原 辰史

一月 七日(月) 第一次世界大戦と日本
山室 信一

一月二九日(月) 第一次世界大戦がもた
らしたものの 山室 信一
人文研アカデミー(レクチャーコンサート)

十一月二八日(火)「第一次世界大戦のあと
—狂亂の一九二〇年代(カウ
エル、ゴドフスキ、ソラブ
ジ、ガーシュインほか)」
岡田 曉生(解説)

小坂 圭太(ピアノ)
班長 藤井 正人

王權と儀禮
本共同研究は、王權と儀禮との關係を古代イン
ドの王權儀禮を中心に研究することを目的として

いる。ヴェーダ文獻を基礎資料にしているが、イ
ンド學の諸分野のほか、言語學、歴史學、考古
學、美術史、人類學などの複数の視點から資料を
分析するとともに、さまざまな時代と地域におけ
る王權と儀禮に關わる問題を比較研究の對象とし
ている。

隔週に開いている研究會では、會讀と報告をほ
ぼ交互に行なっている。會讀では、ヴェーダ祭式
文獻の中から王即位式(ラージャスーヤ)に關す
るすべての箇所を讀解し、この儀禮に關する資料
の集成をめざしている。報告では、王權と儀禮に
關係してさまざまな分野の異なる視點から報告を
おこなっている。四年目の今年度は、會讀につい
ては關連資料の約九割の檢討を終え、報告につい
ては、ヴェーダ祭式學、寫本研究、言語學、イン
ド哲學の分野から報告を受けた。

本年度で研究を完了させる計畫であったが、研
究範圍が當初の豫想以上に擴大したために、期間
をさらに二年延長し、會讀に關しては、資料の讀
解を終えたあと、全體の再檢討を行ないながら全
資料の譯註出版のための編纂作業をおこなう。報
告については、研究視野の擴大を續けるととも
に、これまでの報告を深化・發展させ、さまざま
な地域と時代の王權と儀禮をめぐる論文集にまと
める豫定である。

研究會記録

一月一八日(會讀一五) Vadhula-Srauta-
sutra 一〇、七、四三—一
〇、八、一三 小林 正人

二月一日 (報告二六) 灌頂の儀禮空間

—インドから日本へ—

森 雅秀

三月二日 (報告一七) Cambodian inscriptions of the seventh century: a general introduction through the study of a hitherto unpublished example: K. 1254.

Dominic Goodall

五月三〇日 (會讀一六) Vadhula-Srauta-sutra 一〇'八'一四—二八

堂山英次郎

六月二七日 (會讀一七) Vadhula-Srauta-sutra 一〇'八'二九—四九

梶原三恵子

七月二一日 (報告一八) 祭主の潔齋—イマ祭と王權儀禮における

大島 智靖

一〇月三日 (會讀一八) Vadhula-Srauta-sutra 一〇'九'一—一〇'一〇'一六

手嶋 英貴

一〇月二七日 (報告一九) パイッパラ—タ・サンビター寫本の研究

土山 泰弘

一〇月二二日 (會讀一九) Vadhula-Srauta-sutra 一〇'一〇'一七—二四

大島 智靖

一一月二四日 (報告二〇) オラオンとパハ

リアはど(こ)から来たのか

小林 正人

一二月八日 (報告二一) Net, net—Not this? Not that? Not so?

No, no?—In quest of the original meaning of Yajnavalkya's net-neti formula in BAU
Walter Slaje

班長 籠谷 直人

今年、本研究班の一年目に當たる。近世・近代アジア史の「古典」的研究についての、テキストを読み解きながら、「アジア史の分析視角と方法」について議論した。初年度はまず「經濟史」を基礎にして、テキスト選り、参加者の會讀と擔當報告の二本立てを柱に活動した。以下は擔當報告である。最終年には、學生・院生を対象にした『近世・近代アジア史要覽』(假)の作成を目指した。

四月一八日「共同研究班の立ち上げにあたって」報告：籠谷 直人
テキスト：Douglas C. North and Robert Paul Thomas, *The Rise of the Western World* (Cambridge University Press 1973) (D. C. N. I. S. & R. P. T. マス(速水融ほか共譯)『西歐世界の勃興』ミネルヴァ書房、一九八〇年)

Edward A. Wrigley, *Continuity, chance and change: The character of the industrial revolution in England* (邦譯は'E. A. リグレイ(近藤正臣譯)『エネルギーと産業革命—連続性・偶然・變化—』同文館、一九八九年)

四月二五日「アイサー・ルイスの「勞働の無制限供給」論を読む」

報告：脇村 孝平

テキスト：W. Arthur Lewis, *Racial Conflict and Economic Development* (Harvard University Press 1985) (邦譯は勝俣誠ほか譯『人種問題のなかの經濟』産業能率大學出版部一九八八年)

四月二九日「B・トムリンソンの「インド近代史を読む」

報告：木谷名都子

テキスト：B. R. Tomlinson, *The political economy of the Raj, 1914-1947: the economics of decolonization in India* (Macmillan Press, 1979)

B. R. Tomlinson, *The Economy of Modern India, 1860-1970* (Cambridge University Press, 1993)

B. R. Tomlinson, *The Indian National Congress and the Raj, 1929-1942: the penultimate phase* (Macmillan, 1976)

B・R・トムリンソン「關係の風化」。
一九五〇-七〇年の英印經濟關係」(秋田茂・水島司編『現代南アジア 世界システムとネットワーク』東京大學出版會、二〇〇三年) 五月三一日 「Mark Elvin の "The High-Level Equilibrium Trap" 論 について」報告：城山 智子

テキスト：

Mark Elvin, *The Pattern of the Chinese Past* (Stanford University Press, 1973)。
Mark Elvin, *Another History: Essays on China from a European Perspective* (Sydney: Wild Peony, 1996)

六月二十八日 「ブーン・ヤオンとK・ホメラソンの「一八世紀中國論」を讀む」 報告：籠谷 直人

テキスト：

Roy Bin Wong (王國斌), *China Transformed: Historical Change and the Limits of European Experience* (Cornell University Press, 1997)

Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence: Europe, China and the Making of the Modern World Economy* (Princeton, 2000)

九月二〇日 「トマスC・スミス論の「近世・近代日本史」を考える」 報告：大島眞理夫(ゲストとして依頼)

テキスト：

Thomas C. Smith, *Political Change and Industrial Development in Japan: Government Enterprise, 1867-1880*, (Stanford University Press, 1955) (邦譯は「杉山和雄譯『明治維新と工業發展』東京大學出版會、一九七一年)。

Thomas C. Smith, *The Agrarian Origins of Modern Japan*, (Stanford University Press, 1959) (邦譯は「大塚久雄譯『近代日本』の農村的起源』岩波書店、一九七〇年)。

Thomas C. Smith, *Native Sources of Japanese Industrialization, 1750-1920* (University California Press, 1988) (邦譯は「大島眞理夫譯『日本社會史における傳統と創造—工業化の内在的諸要因 一七五〇—一九二〇年(増補版)』シネルヴァ書房、一九九五年)。

一〇月二五日 「K・N・チョードリ、A・リードのインド洋海域史論を讀む」 報告：藪内 信幸

テキスト：
K. N. Chaudhuri, *Trade and Civilization in the Indian Ocean* (Cambridge University Press, 1985)

A. Reed, *Southeast Asia in the age of Commerce 1450-1680* (Yale University Press, 1988) (邦譯は「大航海時代の東南ア

シア』全二巻、法政大學出版會、二〇〇二年) 一月二十九日 「H・ボーエンの「一八世紀後半イギリス東インド會社論」 報告：谷口 謙次

テキスト：
Bowen, H. V. *Revenue and reform: the Indian problem in British politics 1757-1773*, (Cambridge University Press, New York 1991)。

一月三十一日 「山田盛太郎における「高額小作料と低賃金の相互規定關係」をアジア史に位置づける」 報告：籠谷 直人

テキスト：

山田盛太郎『日本資本主義分析』岩波文庫、一九七七年(初版一九三四年) 「ケインズの「インド通貨論」について」 報告：西村 雄志

テキスト：
則武保夫ほか譯「インドの通貨と金融」『ケインズ全集』第一巻、東洋經濟新報社、一九七七年

二月二〇日 オールラ・ヒストリー會議：「戦後のアジア・ネットワーク」(中國現代史研究會、神戸華僑華人研究會と共同開催) 金 暉(大阪華僑總會名

金 暉(大阪華僑總會名

金 暉(大阪華僑總會名

金 暉(大阪華僑總會名

譽會長)

吉澤 宏始(日中經濟貿易センター元理事長)

土井 英二(兵庫縣貿易監督役)

外から見た近代日本の記録

班長 Silvio Vira

本研究班は平成二〇年度一年限りで實施されたが、實質的には來年度以降の研究班運営のための準備作業として、(一) 関連分野を研究する、特に外國人研究者のネットワークの確立、(二) 個別の研究發表、という活動を行った。秋期には班長の本務のため、研究会の定期的開催が困難だったが、年明けに數回の研究班を豫定している。

二〇〇八年

五月二二日 「外交を越えてー長い一九世紀の日英關係」報告：ロンドン大學 SOAS Angus Locky-

er 教授

六月 九日 「極東への北極通路ースウェーデンのヴェガ號探検隊が見た明治日本」報告：ストックホルム大學日本學部 Gunilla

Lindberg-Wada 教授

七月一四日 「It is Japan but yet there is a difference somehow」:

Editorial Change and Yezo in Isabella Birds 'Unbeaten Tracks in Japan' 報告：京都大學人間・環境學

人文研探検

班長 岩城 卓二・菊地 曉

本研究班は、まもなく八〇周年を迎える人文研の歴史を、基礎的データに基づいて検証し、日本の人文・社會科學のあり方を再検討する試みである。本研究班の対象は、人文研の活動により産み出されたさまざまなプロダクトであるが、大別して(一) 人文研の研究者により執筆された著作、(二) 人文研が擁した人的資源、(三) 人文研の活動により集積された資料群、(四) いわゆる「共同研究」スタイルから「カード・システム」といったさまざまなレベルの方法的蓄積、がある。これらを相互に関連させて把握することが本研究班の課題となる。本年は昨年度に引き継ぎ、基礎的データの整理作業を主眼とした。地下文書室の文書整理や関連研究機關の所蔵資料調査、人文研のプロダクトに携わった研究者からの聞き取り調査、などである。

一月二一日 「西周と近代ー日本學問史への構想」樺山 紘一(ゲスト・印刷博物館長)(文明と言語班と共催)

四月二一日 新村記念財團重山文庫調査
六月三〇日 新村記念財團重山文庫調査
七月一四日 新村記念財團重山文庫調査
七月一六日 文書整理
十一月一〇日 文書整理
十一月一七日 文書整理
十二月二一日 文書整理

文明と言語

班長 横山 俊夫

當研究班は、文明化の過程において言語という社會媒體がどのように變容するか、その諸相を、前近代東アジア文藝學から現代の生物、生命科學にいたる多様な分野の事例研究を基礎に検討する意圖で二〇〇二年度に發足。二〇〇七年三月に當初豫定した五年間の活動を終え、整理期間としての二〇〇七年度には、一六回の研究会合のほか、輪讀資料『難波鉦』校訂ならびに現代上方語譯の第二冊を編集(二〇〇八年刊)、研究報告書の執筆、編集作業にとりかかった。

一月二一日 「西周と近代ー日本學問史への構想」

樺山 紘一(ゲスト・印刷博物館長)

二月 九日 『難波鉦』校訂「空蟬」

廣瀬千紗子 「ヒトゲノム研究の新時代とデータの共有ー科學を通じた連帯は可能か？」 加藤 和人

二月二三日 『難波鉦』校訂「初聲」

古勝 隆一 「義太夫節はどう語られるかーさまざまな義太夫節」 後藤 静夫

個人研究

人文學研究部

- | | | | | | | |
|--------------------------------|-------|--|-------|--------------------|-----------------------|----------------------------|
| 前近代日本の文明史的研究 | 横山 俊夫 | ザガフカスの「義賊」と戦争 | 立木 康介 | インド・中國における佛教の學術と實踐 | 池田 巧 | |
| 近代東アジアにおける日本の法と政治 | 山室 信一 | 近代日本民俗誌システムの研究 | 伊藤 順二 | 文字コード理論 | 安岡 孝一 | |
| フランス革命と近代的主体の成立 | 富永 茂樹 | 近世ヨーロッパの國際金融研究 | 坂本優一郎 | イスラーム東漸史の研究 | 船山 徹 | |
| 近代朝鮮の政治と社會 | 水野 直樹 | 近代西洋醫學發展史研究および身體論 | 田中祐理子 | 佛教研究知識ベース—禪佛教を例として | 稲葉 穰 | |
| 在日米軍を中心とする軍事共同體の人類學的研
究 | 田中 雅一 | ナチス・ドイツの農業政策 | 藤原 辰史 | ウイットルン、クリスティアン | 石川 禎浩 | |
| 文學理論の研究 | 大浦 康介 | 近代朝鮮在住日本人社會の研究 | 李 昇燁 | 中國共產黨史の研究 | 宮宅 潔 | |
| ヴェーダ文獻の生成と傳承の研究 | 藤井 正人 | 身體技法の認識論 | 倉島 哲 | 秦漢時代の制度史 | 矢木 毅 | |
| 人種・エスニシティ論 | 竹澤 泰子 | 近代詩の虚構性 | 久保 昭博 | 高麗官僚制度研究 | 古勝 隆一 | |
| 戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク | 籠谷 直人 | 再構築されるオリシヤ崇拜—異なる「人種・宗
教」をとりこむアフリカ系アメリカ人の社會運
動— | 小池 郁子 | 中國註釋學史研究 | 中國近世の國家支配の研究 | 古松 崇志 |
| 近代天皇制の文化史的研究 | 高木 博志 | 戦間期日本の大衆社會・文化 | 黒岩 康博 | 中國の小説、演劇及び説唱文學の歴史 | 文字定義情報に基づく文書表現系に関する研究 | 守岡 知彦 |
| 近代日本の藝術と西洋 | 高階繪里加 | 中國美術の様式と意味 | 金 文京 | 中國の古代理世の法制 | 中國古代中世の官制史 | 藤井 律之 |
| 現代社會における生物學・生命科學 | 加藤 和人 | 中國建築の様式・技法・空間 | 會布川 寛 | 清代の文化と社會 | モンゴル時代の文化政策と出版活動 | 宮 紀子 |
| 音樂におけるロマン派とメロドラマ的音樂 | 岡田 曉生 | 近代中國の綿紡織業 | 田中 淡 | 中國科學の思想史的考察 | 明代後期北慮南倭時代の中國社會 | 山崎 岳 |
| 一九世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァ
ティブズム | 小關 隆 | 道教思想研究 | 森 時彦 | 近代中國の財政と社會 | 中國家具とその使用に関する研究 | 高井たかね |
| 南アジアの歴史人類學 | 田邊 明生 | 敦煌寫本の言語史的研究 | 麥谷 邦夫 | 先秦時代の金文 | 中國唐宋の文學批評 | 永田 知之 |
| 近世ヨーロッパの歴史敘述と政治思想 | 王寺 賢太 | 中國古代中世の法制 | 高田 時雄 | 古代中國の考古學研究 | 中國中世の考古學研究 | 近代中國におけるナシヨナリズムと政治シンボ
ル |
| 幕末期の畿内・近國社會 | 岩城 卓二 | 清代の文化と社會 | 富谷 至 | 川西走廊の漢藏諸語の記述言語學的研究 | 井波 陵一 | 小野寺史郎 |
| 精神分析的知を思想的に位置づける試み | | 近代中國の思想史的考察 | 武田 時昌 | | 岩井 茂樹 | |
| | | 先秦時代の金文 | 淺原 達郎 | | 岡村 秀典 | |

事業概況

第四回 TOKYO漢籍 SEMINAR

二〇〇八年三月七日

於 學術総合センター(千代田區一ツ橋)

儒・佛・道の經典觀―唐代の宗教と書物

「玄宗と三教」『孝經』『道德眞經』『金剛般若經』註の撰述をめぐって

「大乘菩薩戒の道」『梵網經』と東アジア佛教

齋藤 智寛 古勝 隆一

「隋唐の學界における孔安國」

特別講演特別講演(人文研アカデミー)

二〇〇八年三月二五日

於 京都大學時計臺百周年記念ホール

知識労働とプレカリアート

王寺 賢太

コメンテーター 市田 良彦

文化講座(人文研アカデミー/NHK大阪文化センター)

二〇〇八年四月、五月、七月、八月

於 NHK大阪文化センター

時代を生きた女性たち―中國編(楊貴妃から江青まで)

四月一七日 楊貴妃 金 文京

五月一五日 呂太后 宮宅 潔

五月一九日 武則天 永田 知之

七月一七日 西太后 岩井 茂樹

八月二一日 毛澤東の妻たち 石川 禎浩

ヨীগの理論と實踐(人文研アカデミー)

二〇〇八年四月、五月、六月

於 本館大會議室

四月一五日、二二日、五月一三日、二〇日、二七日、六月三日

田邊 明生

共同研究セミナー(人文研アカデミー)

二〇〇八年六月 於 本館共通二講義室

身體IIフェティッシュをめぐる技術―強壯劑、人體模型、サイバーブッダ

野生の技法―強壯する男性身體

剝製の技術―蠟人形館の夢

東京大學大学院人文社會系研究科博士課程 妙木 忍

複製技術の人間化―さまざまなドールの變貌

廣島大學大学院教育學研究科 西村 大志

複製技術の最新綫―サイバーブッダの誕生

神戸大學大学院國際文化學研究科教授 岡田 浩樹

夏期公開講座(人文研アカデミー)

二〇〇八年七月五日

於 本館共通一講義室

古典再讀―いま讀んだらこんな面白い(三)

悪名高き正史―沈約『宋書』と魏收『魏書』

藤井 律之

カフカスのとりこ―トルストイ以後のカフカス山嶽史の表象

伊藤 順二

讀まれなかつた古典―『大唐西域記』雜考

高田 時雄

特別シンポジウム(人文研アカデミー)

二〇〇八年七月一九日

於 本館セミナー室一

「いま(著作權・知的財産權)問題が問いかけるもの」

知的所有權とフリーソフトウェアについて

オルレアン大學法學部教授

ミカイル・クシファラス

データベース消費とコミュニケーション志向―なにがコンテンツか?

哲學者、評論家、東京工業大學世界文明センター特任教授 東 浩紀

「お互いさま」の自由ソフトウェア活動

フリーソフトウェアアイニシアティブ理事

長、産業技術總合研究所情報技術研究部門

自由ソフトウェア部門研究グループ長

新部 裕

コメンテーター 慶應技術大學産業研究所

准教授 石岡 克俊

ジュニアアカデミー(人文研アカデミー/京都大學總合博物館/京都大學好奇心ネットワーク)

二〇〇八年七月二六日

於 京都大學總合博物館

イメージを讀む作法―映像、寫眞、そしてマンガ

大浦 康介

報

「事實らしき」はいかに作られるか―映像分析入門―

大阪大學文學部准教授 北原 恵

マンガをウラから読んでみる―マンガ分析入門―

京都國際マンガミュージアム研究員

表 智之

棚田が美しいということ―寫眞分析入門―

菊地 暁

共同研究セミナー(人文研アカデミー)

二〇〇八年一〇月 於 本館共通一講義室

アジアの佛教遺跡を掘る

一〇月 九日 中國佛教文化の開花―佛塔と佛像の東傳― 向井 佑介

一〇月一六日 ガンダーラの寺院と佛像 立命館大學文學部講師 下垣 仁志

一〇月二三日 アンコール遺跡群と佛像埋納遺構 京都府立大學文學部准教授 菱田 哲郎

一〇月三〇日 佛教西漸の足跡―アフガニスタン以西の佛教遺跡― 稻葉 稷

文化講座(人文研アカデミー/NHK大阪文化センター)

二〇〇八年一〇月、十一月、十二月、二〇〇九年一月、二月 於 NHK大阪文化センター

時代を生きた女性たち―ヨーロッパ編(マリー・アントワネットからレニ・リーフェンシュタールまで)

一〇月一六日 マリー・アントワネット―フランス革命の露と消えた王妃 王寺 賢太

十一月二〇日 ヴィクトリア女王―女王が君主であること 小關 隆

二月一八日 マリー・キュリー―科學・女性・二〇世紀 田中祐理子

二〇〇九年一月一五日 ジョセフィン・ペイカー―人種を超えて 久保 昭博

二〇〇九年二月一九日 レニ・リーフェンシュタール―ナチスを先導した映畫監督 藤原 辰史

關所七九周年記念講演會

二〇〇八年十一月二〇日

於 本館大會議室

病原菌と千里眼―微生物學史のひとこまから 田中祐理子

韓國の世界遺産・宗廟の歴史 矢木 毅

中國抗戰時期 木刻運動の一側面 日中藝術研究會・代表 三山 陵

レクチャー・コンサート(人文研アカデミー)

二〇〇八年十一月一八日

於 關西日佛會館稻畑ホール 第一次世界大戰のあと―狂亂の一九二〇年代 岡田暁生

ピアノ演奏 お茶の水女子大學大學院人間文化創世科學研究科准教授 小坂 圭太

漢字情報研究センター講習會

・二〇〇八年度漢籍擔當職員講習會(初級) 漢字情報研究センター講習會 第一日(二〇月六日)

オリエンテーション 森 時彦

漢籍について 井波 陵一

カードの取り方―漢籍整理の實踐 梶浦 晉

第二日(二〇月七日) 工具書について 永田 知之

漢字目録カード作成實習 目録檢索とデータベースの檢索 安岡 孝一

第三日(二〇月八日) 漢籍データ入力實習(一) 和刻本について 慶應義塾大學附屬研究所斬道文庫准教授 高橋 智

第四日(二〇月九日) 漢籍データ入力實習(二) 朝鮮本について 朝鮮本について 矢木 毅

第五日(二〇月一〇日) 實習解説 情報交換・質疑應答 山崎 岳

・二〇〇八年度漢籍擔當職員講習會(中級) 第一日(十一月一〇日) オリエンテーション 森 時彦

第二日(十一月一〇日) 經部について

経部について

経部について

経部について

経部について

文學研究科准教授

宇佐美文理

叢書部について

高井たかね

第二日(十一月一日)

安岡 孝一

史部について

藤井 律之

第三日(十一月二日)

武田 時昌

漢籍データ入力実習(二)

道坂 明廣

第四日(十一月三日)

山崎 岳

人間・環境學研究科准教授

濱田 麻矢

漢籍データ入力実習(三)

井波 陵一

實習解説

情報交換・質疑應答

現代中國書について

神戸大學大學院人文研究科准教授

情報交換・質疑應答

井波 陵一

所員動靜

○中西裕樹(東方學研究部)助教は、辭任(二〇〇八年三月三十一日付)の上、同志社大學言語文化教育研究センター助教就任。

○齋藤智寛(東方學研究部)助教は、辭任(二〇〇八年三月三十一日付)の上、東北大學大學院文學研究科准教授就任。

○谷川穰(人文學研究部)助教は、文學研究科准教授就任(四月一日付)。

○小野寺史郎氏を助教(附屬現代中國研究センター)に採用(四月一日付)。

○高井たかね(附屬漢字情報研究センター)助教を東方學研究部に配置換(四月一日付)。

○袁廣泉 大學共同利用機關法人人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授(附屬現代中國研究センター、四月一日〜二〇〇九年三月三十一日)。

○VITA, Silvio イタリア國立東方學研究所所長は、客員教授(文化研究創成研究部門、四月一日〜二〇〇九年三月三十一日)。

○JACQUET, Benoit Marcel Maurice フランス國立極東學院京都支部長は、客員准教授(文化研究創成研究部門、八月一日〜二〇〇九年三月三十一日)。

○小林善文神戸女子大學文學部教授は、特任教授(二〇〇月一日〜二〇〇九年三月三十一日)。

○黒岩康博氏を助教(人文學研究部)に採用(一

〇月一六日付)。

○田中雅一教授(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、二〇〇八年一月九日大阪發、マドラス大學、シャクテイ寺院、エグモア地區に於いて文化接觸についての資料収集及び調査を行い、SNDT大學に於いてイスラーム女性についての資料収集を行い、一月二八日歸國。

○田中淡教授(東方學研究部)は、一月一五日程田發、臺灣大學に於いて中國建築史・美術史研究の情報交換等、故宮博物館に於いて中國建築・生活空間・美術に關する研究史料蒐集、美濃鎮聚落・古建築群に於いて中國農村聚落・民居の調査と生活習俗に關する資料蒐集を行い、一月二一歸國。

○小池郁子助教(人文學研究部)は、受託研究費により、一月一八日大阪發、ダーラビ地區に於いて都市開發と環境問題についての調査を行い、マプサ地區に於いて多文化共生と環境問題についての調査を行い、一月二七日歸國。

○ウィッテルン、クリスティアン准教授(附屬漢字情報研究センター)は、二月一四日大阪發、中華佛學研究所に於いてEBTI after 15 and CBETA at 10 Years: Joint International Conference on Digital Buddhist Studies に出席、二月二〇日歸國。

○藤井正文教授(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、二月一六日大阪發、Sarasvati Bhavana Library に於いてヴェーダ

寫本の調査を行い、二月二五日歸國。

岡田暁生准教授(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、二月二〇日大阪發、バイエルン國立圖書館に於いて一九世紀音樂雜誌の調査を行い、二月二七日歸國。

籠谷直人教授(人文學研究部)は、受託研究費により、三月二日大阪發、香港中文大學に於いてワークショップ“Empires, Networks, and Global Governance: Dialogues with Japanese Scholars”参加及び研究資料調査を行う、三月六日歸國。

竹澤泰子教授(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金(一部先方負擔)により、三月一日大阪發、カリフォルニア大學、スタンフォード大學、カリフォルニア大學ロサンジェルス校、ポモナ大學に於いて表象理論に關する研究打合せ等を行い、三月一三日歸國。

田中雅一教授(人文學研究部)は、二月二三日大阪發、コロンボ大學に於いて宗教マイノリティの研究を行い、三月一三日歸國。

立木康介准教授(人文學研究部)は、三月六日大阪發、Ecole Normale Supérieureに於いて「精神分析運動の歴史的展開と今日的意義を啓蒙思想の座標軸上で捉え直す試み」のための資料収集を行い、三月一四日歸國。

水野直樹教授(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、三月一日大阪發、チェジュ大學校、チェジュ市近郊、ソウル市内に於いて植民地期戸籍(除籍簿)の調査を行

い、三月一五日歸國。

池田巧准教授(東方學研究部)は、共同研究費により、三月一六日大阪發、中央研究院歴史語言研究所に於いて現代中國の言語社會に關する資料収集及び研究打合せを行い、三月一九日歸國。

曾布川寛教授(東方學研究部)は、三月一六日大阪發、國家文物局、西藏自治區博物館、ポタラ宮、薩加寺、夏魯寺に於いてチベット佛教美術に關する現地調査、資料蒐集を行う、三月二二日歸國。

田邊明生准教授(人文學研究部)は、三月九日大阪發、ティンブーに於いてプータンにおける民主化・環境政策・世代間對立について、フィールド調査及び情報収集を行い、三月二九日歸國。

高木博志准教授(人文學研究部)は、大學運営費により、四月三日大阪發、ハイアット・レージェンシーホテルに於いてアジア學會に出席及び報告を行い、四月八日歸國。

李昇煥助教(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金及び京都大學教育振興財團助成金により、四月三日常滑發、ハイアット・レージェンシーホテルに於いて米國アジア學會年次大會に出席及び報告、UC Berkeleyに於いて東アジア圖書室所藏の近代日本・朝鮮關係の文獻調査及び閲覽を行い、四月一日歸國。

船山徹准教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、四月二二日大阪發、

中山大學、韶關市周邊、香港大學に於いて佛教關係研究打合せ及び佛教關係遺跡調査を行い、四月三〇日歸國。

古勝隆一准教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、四月二二日大阪發、中山大學、韶關市周邊、香港大學に於いて佛教關係研究打合せ及び佛教關係遺跡調査を行う、四月三〇日歸國。

高田時雄教授(東方學研究部)は、四月二〇日大阪發、Institute of Oriental Studies, St. Petersburg Branch, Russian Academy of Sciences; St. Petersburg State University に於いて西域及びシルクロードの社會と文化に關する連續講義を行い、五月二日歸國。

加藤和人准教授(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金(一部先方負擔)により、四月二八日大阪發、The Westin Hotel in Calgary に於いて International GE3JS Symposium 二〇〇八に参加及び口頭發表、Renaissance Hotel Cleveland に於いて Translating ELSIに参加及び口頭發表を行う、五月六日歸國。

富谷至教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、五月一八日大阪發、ライデン大學に於いてシンポジウム(禮儀と正義)の打合せを行い、五月二二日歸國。

大浦康介教授(人文學研究部)は、三月二日大阪發、パリ第七大學に於いて講演及び共同研究参加を行い、五月三一日歸國。

- 。加藤和人准教授（人文學研究部）は、受託研究費により、六月一〇日大阪發、Pennsylvania Convention Center に於て 6th ISSCR 出席し、ポスター発表を行い、六月一六日歸國。
- 。麥谷邦夫教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、六月一九日大阪發、四川省社會科學院に於いて「道藏輯要」のテキスト、マークアップに關する中國側研究協力者との研究打合せを行い、六月二四日歸國。
- 。加藤和人准教授（人文學研究部）は、受託研究費（一部先方負擔）により、六月二二日大阪發、Human Fertilisation and Embryology Authority に於て H1d5 細胞研究の倫理的課題に關する資料収集及び意見交換を行い、St Anne's College に於て 1st Governing Genetic Databases Project Int. Conference June 2008 に參加、口頭発表及び i p s 細胞研究の倫理的課題に關する資料収集を行い、六月二八日歸國。
- 。森時彦教授（東方學研究部）は、共同研究費（一部先方負擔）により、七月一日大阪發、北京大學に於いて學術講演及び研究打合せを行い、七月六日歸國。
- 。ウィツテルン、クリスティアン准教授（附屬漢字情報研究センター）は、七月二日大阪發、ハイデルベルグ科學院に於いてシンポジウム Buddhist Epigraphy in China に出席及び研究報告を行い、七月八日歸國。
- 。田中淡教授（東方學研究部）は、五月一六日大阪發、ハイデルベルグ大學藝術史研究所に於いて中國建築史に關するセミナーに參加、講義を行い、六月一六日勤務終了、七月一〇日歸國。
- 。船山徹准教授（東方學研究部）は、六月一八日大阪發、ハイデルベルグ學術アカデミーに於いて共同研究「中國佛教石經」參加および研究集會での発表を行い、七月一五日歸國。
- 。竹澤泰子教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、七月一七日成田發、ハーバード大學において人種に關する共同研究打合せ、ニューヨーク大學及びカリフォルニア大學に於いて國際シンポジウム打合せを行い、七月三日歸國。
- 。高田時雄教授（東方學研究部）は、七月一五日大阪發、Institute of Oriental Studies, St. Petersburg Branch, Russian Academy of Sciences; St. Petersburg State University に於て「一九世紀末～二〇世紀初におけるロシアの中央アジア探検」研究プロジェクトに關する助言を行い、七月二五日歸國。
- 。石川禎浩准教授（附屬現代中國研究センター）は、受託研究費により、七月一七日大阪發、洛陽師範學院に於いて中國近現代史研究打合せ及び第三回中國近代史思想國際學術シンポジウム出席、河南大學圖書館に於いて中國社會主義運動に關する資料調査、河東博物館に於いて中國近現代史資料調査を行い、七月二六日歸國。
- 。山崎岳助教（附屬漢字情報研究センター）は、七月二三日大阪發、杭州市内に於いて杭州市内史跡調査、杭州工商大學に於いて國際シンポジウムに參加、研究発表、船山博物館等に於いて定海區史跡調査、馬墓港等に於いて帶海港調査を行い、八月一日歸國。
- 。金文京教授（東方學研究部）は、七月二七日大阪發、中央研究院歷史語言研究所に於いて「東亞文化意象之形塑」講演及び座談會に參加し、八月二日歸國。
- 。船山徹准教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、七月二八日大阪發、白馬寺に於いて佛教史夏期集中講義および資料収集を行い、八月一六日歸國。
- 。田邊明生准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月一日大阪發、ブナーシェワルおよびプリー近郊に於いて民主化にともなう社會變容についてのフィールド調査を行い、八月一九日歸國。
- 。池田巧准教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、七月三〇日大阪發、中央民族大學に於いて西南中國の言語に關する文獻調査し、西南民族大學に於いてムニャ語とリュズ語の調査を行い、八月二〇日歸國。
- 。曾布川寛教授（東方學研究部）は、八月一七日大阪發、青海省文物考古研究所、塔爾寺、薩迦寺、夏魯寺等に於いてチベット佛教美術に關する現地調査、資料蒐集を行い、八月二七日歸國。

。小野寺史郎助教（附屬現代中國研究センター）は、共同研究費により、八月二三日大阪發、上海圖書館等に於いて近代中國に關する資料収集を行い、九月二日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、七月一五日大阪發、カールスルー大學に於いて佛教年表について研究打合せ、オスロ大學に於いて禪學ワークショップに参加、ライデン大學に於いてLeiden Symposium "Ritual, Art And Justice" に出席し、九月五日歸國。

。富谷至教授（東方學研究部）は、京都大學教育研究振興財團助成金により、八月三〇日大阪發、國際シンポジウム「東アジアにおける禮と正義」打合せ及びシンポジウム開催を行い、九月五日歸國。

。矢木毅准教授（東方學研究部）は、京都大學教育振興財團助成金により、八月三〇日大阪發、國際シンポジウム「東アジアにおける禮と正義」打合せ及びシンポジウム開催を行い、九月五日歸國。

。石川禎浩准教授（附屬現代中國研究センター）は、九月三日大阪發、國立博物館、チュラロンコン大學に於いてタイ移民史に關する調査、ドイツ博物館に於いてポルトガル統治に關する調査、マニ・パワンに於いてインド獨立運動史に關する調査を行い、九月一二日歸國。

。王寺賢太准教授（人文學研究部）は、大學運營

費（一部先方負擔）により、七月三一日大阪發、ライデン大學に於いて Scaliger Institute Scaliger Fellow とし、調査研究を行い、パリ國立圖書館及び國立古文書館に於いて資料調査を行い、九月一六日歸國。

。立木康介准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月一日大阪發、Ecole Normale Supérieure に於いて資料・文獻収集を行い、九月一六日歸國。

。小野寺史郎助教（附屬現代中國研究センター）は、九月一二日大阪發、上海市圖書館等に於いて資料収集を行い、復旦大學に於いて復旦大學リベラリズム、ワークショップに参加し、九月一七日歸國。

。田邊明生准教授（人文學研究部）は、九月二二日大阪發、アジスアベバ市内等に於いてエチオピアの在來知に關するスタディツアー、Harari Cultural Center Hall に於いて國際ワークショップに討論者として出席し、九月二二日歸國。

。池田巧准教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月一四日大阪發、大英博物館に於いてチベット文獻資料収集、ロンドン大學に於いて第四一回國際鑑藏言語學會に参加し、九月二三日歸國。

。山室信一教授（人文學研究部）は、九月二二日常滑發、南開大學に於いて講義及び講演を行い、九月二八日歸國。

。岡田曉生准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二六日大阪

發、ライプツヒ音楽大學に於いて、ドイツ音樂學會國際大會出席及びシンポジウム発表を行う、一〇月三日歸國。

。高田時雄教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、一〇月一日大阪發、College de France に於いて「ポール・ペリオ：歴史から傳説へ」國際シンポジウム出席、Bibliothèque Nationale に於いて敦煌寫本の調査を行い、一〇月七日歸國。

。金文京教授（東方學研究部）は、一〇月一五日大阪發、ソウル大學に於いて第一回奎章閣韓國國際シンポジウム出席及び論文発表を行い、一〇月一九日歸國。

。高田時雄教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、一〇月二三日大阪發、南華大學、佛光山に於いて佛教文獻與文學國際學術檢討會に出席、臺灣國家圖書館に於いて表音文學書寫中國語文獻の調査を行い、一〇月二八日歸國。

。田中雅一教授（人文學研究部）は、一〇月二二日大阪發、エジンバラ大學、スターリング大學、アバディーン大學、グラスゴー大學、ランカスター大學、バース・スパ大學ロンドン大學に於いて英國における宗教教育の調査を行い、グラスストンペリー市内に於いて多文化と宗教實についての調査を行い、一一月一日歸國。

。山室信一教授（人文學研究部）は、一〇月二九日大阪發、中央研究院臺灣史研究所に於いて國際學術檢討會出席及び史料調査、臺灣大學人文

。社會高等研究院に於いて講演を行い、一月二日歸國。

。立木康介准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、一〇月二三日成田發、ワシントンDC市内及び議會圖書館に於いて「精神分析運動の歴史的展開と今日的意義を啓蒙思想の座標軸上で捉え直す試み」のための資料収集を行い、一月二日歸國。

。水野直樹教授（人文學研究部）は、一〇月二九日大阪發、中央研究院・臺灣史研究所に於いて、「日本帝國植民地之比較研究」國際學術檢討會に参加、報告及び臺灣植民地支配關係資料調査を行い、一月三日歸國。

。李昇煥助教（人文學研究部）は、一〇月二九日大阪發、中央研究院・臺灣史研究所に於いて、「日本帝國植民地之比較研究」國際學術檢討會に参加、發表及び臺灣植民地支配關係史料調査を行い、一月三日歸國。

。坂本俊一郎助教（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、一〇月二三日大阪發、英國圖書館、ナショナル・アーカイヴズに於いて一八世紀イギリスの證券投資關係史料の調査を行い、一月七日歸國。

。高田時雄教授（東方學研究部）は、一月三日大阪發、首都師範大學に於いて講學を行い、一月九日歸國。

。池田巧准教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、一月三日成田發、中國社會科學院に於いて民族

歴史文獻國際檢討會及び研究會議出席、宁夏社會科學院に於いて第三回國際西夏學會議及び研究會議に出席、一月一日歸國。

。小池郁子助教（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、一月九日大阪發、カルデシズモ團體に於いて心靈術運動資料の文獻収集及び調査を行い、一月一八日歸國。

。加藤和人准教授（人文學研究部）は、一月一四日大阪發、Bethesda North Marriott Hotel & Conference Center に於いて「國際がんゲノムコンソーシアム第一回ワークショップ」に出席し、一月一九日歸國。

。岡村秀典教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、一月一五日大阪發、遼寧省博物館に於いて北魏出土文物の調査、北塔博物館に於いて思燕寺出土文物の調査、中國社會科學院考古研究所に於いて調査成果の意見交換を行い、一月二二日歸國。

。向井佑介助教（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、一月一五日大阪發、遼寧省博物館に於いて北魏出土文物の調査、北塔博物館に於いて思燕寺出土文物の調査、中國社會科學院考古研究所に於いて調査成果の意見交換を行い、一月二二日歸國。

。稻葉穰准教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、一月一六日大阪發、ウイーン市内に於いて中央アジア宗敎史に關する研究打合せ、文化歴史博物館に於いて國際學會 Iranian Huns and

Western Turks に出席、研究發表を行い、一月二二日歸國。

。田邊明生准教授（人文學研究部）は、一月一七日大阪發、ヒルトン・ホテルに於いてアメリカ人類學會一〇七回大會出席し、一月二五日歸國。

。池田巧准教授（東方學研究部）は、共同研究費により、一月二〇日大阪發、中央研究院語言研究所に於いて四川藏緬語國際檢討會に参加、一月二五日歸國。

。ウィツテルン、クリスティアン准教授（附屬漢字情報研究センター）は、一月一九日愛知發、ハーバード大學に於いて Biographical Database Workshop に出席及び研究報告を行う、一月二六日歸國。

。岡田曉生准教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部先方負擔）により、一月二二日大阪發、ドレスデン音樂大學に於いて第一次世界大戰の現代世界の成立に關する越領域的研究に關する資料収集、講義、音樂文化に關する資料収集を行い、一月二八日歸國。

。小野寺史郎助教（附屬現代中國研究センター）は、共同研究費（一部先方負擔）により、一月二七日大阪發、中山大學に於いて第二回「近代知識與制度體系轉型」學會出席及び資料調査を行い、一月二一日歸國。

。石川禎浩准教授（附屬現代中國研究センター）は、受託研究費（一部先方負擔）により、一

月二七日大阪發、中山大學に於いて第二回「近代知識與制度體系轉型」學會出席及び資料調査を行い、二月四日歸國。

。範谷直人教授（人文學研究部）は、二月三日大阪發、Inha University に於いて國際シンポジウム「居留地研究」に参加、報告を行い、二月六日歸國。

。山崎岳（附屬漢字情報研究センター）は、文部科學省科學研究費補助金により、二月一日大阪發、湄州媽祖廟、泉州市博物館、海交史博物館等に於いて東アジア海域交流史關係史料調査を行い、二月八日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附屬漢字情報研究センター）は、二月二日大阪發、ハイデルベルグ科學院に於いてPNC 國際學術會議に出席、研究報告を行い、二月八日歸國。

。富谷至教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、二月五日大阪發、ライデン大學に於いて本年度開催のシンポジウム報告書作成、來年度シンポジウムの協議、ハンブルグ大學に於いて出土文學資料研究に關する打合せ、ミュンスター大學に於いて二國間共同研究の進め方に關する協議を行い、二月一日歸國。

。菊地曉助教（人文學研究部）は、二月一日大阪發、國立民俗博物館に於いて二〇〇八年度韓國民俗學會國際學術大會報告、河回村に於いて「文化財保護制度における世界遺産條約の戰

略的受容と運用に關する日韓比較研究」現地調査及び資料調査を行い、二月一七日歸國。

。高田時雄教授（東方學研究部）は、二月八日大阪發、Institute of Oriental Manuscripts, Russian Academy of Sciences に於いてロシア探検隊收集「西域出土の文獻—文字の文化史—」展のための豫備調査を行い、二月一九日歸國。

。田中雅一教授（人文學研究部）は、受託研究により、二月一〇日常滑發、コロンボ大學に於いて災害と環境についての調査を行い、二月二日歸國。

。久保昭博助教（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金（一部私費）により、二月一日大阪發、パリ市内及びフランス國立圖書館に於いて第一次世界大戰關連資料調査を行い、二月三日歸國。

。李昇燁助教（人文學研究部）は、二月二日大阪發、國家記録院に於いて朝鮮植民地支配と李王家に關する資料調査を行い、二月三十一日歸國。

外国人研究員

。XIFARAS, Mikhail Dorel オルレアン大學法學部教授
法とフィクション
（文化生成研究客員部門）
受入教員 大浦教授
期間 二月一六日～八月一五日

。桑 兵 中山大學歴史系教授
近代中日學術交流史
（文化連關研究客員部門）

受入教員 森教授
期間 二月一九日～八月一八日
。牟 發松 華東師範大學歴史系教授
石刻資料から見た漢唐間の地方社會及びその國家との關係
（文化生成研究客員部門）
受入教員 富谷教授
期間 八月二〇日～二〇〇九年二月一九日

。STERLING, Marvin Dale インディアナ大學ブルーミントン校人類學部准教授
アフリカ人ディアスポラを超える黒人性の表象・東アジアの場合
（文化連關研究客員部門）
受入教員 竹澤教授
期間 一〇月一日～二月三日

招へい外国人學者
。ESPOSITO, Monica
道藏輯要の研究

受入教員 麥谷教授
期間 二〇〇六年四月一日～二〇〇九年三月三十一日（繼續）
。餘 欣 復旦大學歴史學系副教授
日本所藏博物學漢籍研究
受入教員 高田教授
期間 二〇〇七年九月二五日～二〇〇九年九月

二四日(繼續)

。高 啓安 蘭州商學院教授

中國におけるシルクロード飲食文化の研究

受入教員 高田教授

期間 二〇〇七年一月二〇日～二〇〇九年一月

一月一九日(繼續)

。黃 仕忠 中山大學教授

日本藏中國戲曲の文獻學的研究

受入教員 金教授

期間 二月一日～三月十五日

。蔡 榮婷 中正大學中國文學系教授

宋代禪宗敘事文學研究

受入教員 高田教授

期間 二月一日～八月二〇日

。關 曉紅 中山大學歷史系教授

清末官制改革についての研究

受入教員 石川准教授

期間 二月一九日～八月一日

。BREIN, John ロンドン大學准教授

日吉大社の社會史：近世から近代へ

受入教員 高木准教授

期間 二月一九日～七月三十一日

。ANDERL, Christoph University of Oslo, Post-doctoral research fellow; senior lecturer

Research on Chan-Buddhist language and literature in the Tang and Song periods

受入教員 ウィッテルン准教授

期間 三月一九日～六月二二日

。王 三慶 國立成功大學中國文學系教授

漢語四聲與詩律、音樂之關涉研究

受入教員 高田教授

期間 四月一日～四月三〇日

。JAMI Catherine Florence CNRS - Chargée de recherche

梅文鼎の中西數學研究とその科學思想

受入教員 武田教授

期間 四月一日～四月三〇日

。CULLEN, Christopher Needham Research Institute, Director

中國古代の數學、數理天文學

受入教員 武田教授

期間 四月一日～四月三〇日

。房 德鄰 北京大學歷史系教授

中國近代文化史

受入教員 森教授

期間 四月一日～六月九日

。廖 幼華 國立中正大學歷史系教授

唐代南選地區的地域性差異——時間與空間的動態研究

受入教員 高田教授

期間 四月一日～五月一日

。柳 楊善 カトリック大學校人文學部教授

日本におけるエン・ドンジュ(尹東柱)研究動向に關する調査

受入教員 水野教授

期間 六月二〇日～八月一九日

。王 永平 首都師範大學歷史學院教授

東西方文明的互動與唐代文化的走向

受入教員 水野教授

期間 九月二日～九月二十八日

。顏 娟英 臺灣・中央研究院歷史語言研究所研究員

武周時期佛教藝術

受入教員 曾布川教授

期間 一月一日～二月一日

。林 炳德 忠北大學校人文大學史學科教授

中國法制史の研究

受入教員 富谷教授

期間 一月二二日～二〇〇九年二月二一日

。鞏 文 中國社會科學院考古研究所副研究員

三～六世紀の裝身具からみた東アジアの文化交流

受入教員 岡村教授

期間 一月五日～二〇〇九年三月五日

外國人共同研究者

。SCHERRMANN, Sylke Ulrike 青島舊藏ドイツ語文獻中の法制關係資料の調査

期間 二〇〇六年一月一日～二〇〇九年三月三十一日(繼續)

。趙 成雲 植民地朝鮮における日本視察團の派遣に關する研究

受入教員 水野教授

期間 一月一日～二〇〇九年一月一日

。烏 蘭

清代のモンゴル史——滿洲族とモンゴル族の關係を中心に

受入教員 岩井教授

期間 四月一日〜二〇〇九年三月三十一日

MURPHY, Regan Harvard University, PHD student

江戸時代の佛教と國學の關係の再評價(契沖・富永仲基・慈雲)

受入教員 高木准教授

期間 六月一五日〜八月一日

魯 相蒙 プリンストン大學東アジア研究科・博士課程

日本帝國の都市計畫と植民地中産階級の政治動員——京城を中心に——

受入教員 水野教授

期間 九月二四日〜二〇〇九年八月三十一日

。SAVELYEVA, Anna エルミターージュ美術館 東洋部研究員

一八九一年ニコライ訪日と有栖川官邸

受入教員 高木准教授

期間 一〇月一三日〜一〇月二三日

外國人研究生

。安 鍾洙

身體によるハーフへの他者化と、その變動

受入教員 田中教授

期間 一〇月一日〜二〇〇九年三月三十一日

。MC DONALD, Kate

日本帝國における觀光

期間 一〇月一四日〜二〇〇九年一〇月二三日 受入教員 水野教授

出 版 物

紀要

東方學報 八一册(紀要第一五七册)

二〇〇七年九月二五日刊

東方學報 八二册(紀要第一五八册)

二〇〇八年三月二五日刊

人文學報 第九六號(紀要第一五九册)

二〇〇八年四月三〇日刊

東洋學文獻類目二〇〇五年度

二〇〇八年三月二七日刊

東洋學文獻類目二〇〇五年度補遺版

二〇〇八年三月二七日刊

人文學報 第九七號(紀要第一六〇册)

二〇〇八年八月三十一日刊

ZINBUN number 四〇

二〇〇八年三月刊

研究報告その他

「敦煌寫本研究年報」第二號 西陲發現中國中
世寫本研究班 高田時雄編

二〇〇八年三月三十一日刊

シルクロード發掘七〇年 雲岡石窟からガンダ
ーラまで

二〇〇八年一月一日刊

所報人文 第五五號

二〇〇八年六月三〇日刊

東方學資料叢刊 第一六册

二〇〇八年二月一五日刊

漢字と情報 第一六號

二〇〇八年三月一〇日刊

東洋學へのコンピュータ利用 第一九回研究セ
ミナー

(二〇〇八年三月二一日實施)

二〇〇八年三月二二日刊

漢字と文化 第一二號

二〇〇八年三月三十一日刊

「石刻千字文」(上・中・下)

二〇〇八年三月三十一日刊

「漢字文化の全き繼承と發展のために」

京都大學二一世紀COEプログラム東アジア

世界の人文情報學研究教育據點報告書

二〇〇八年三月三十一日刊

漢字文化研究年報 第三輯

二〇〇八年三月刊

「漢字文化三千年」國際シンポジウム報告書

(二〇〇七年二月一〇日～二二日實施)

二〇〇八年二月刊

オープン・フォーラム「漢字文化の今 五」報

告書—漢字文化の繼承と發展—

(二〇〇八年二月一〇日實施)

二〇〇八年三月刊